

再帰構文の諸相 — 受動と自発を中心に —

井口 容子
(広島大学)

フランス語の再帰構文(代名動詞の構文)の用法のうち、受動的用法をめぐっては様々な興味深い問題がある。特に受動的再帰構文の中で、いわゆる「中間構文」に対応するタイプと、それ以外のものとの間で線を引くべきではないかという提案がしばらく前からみられる(Yamada 2002, 2009, 林 2004, 松原 2006, 井口 2007 等)。井口(2007)においては前者を「中間構文型」、後者を「未完了受動型」と呼んだ。以下にそれぞれの代表的な例を示す。

(1)Ce livre se lit facilement. [中間構文型]

(2)Le vin blanc se boit frais. [未完了受動型]

両者の間には、「モダリティ」、「共起する副詞的表現」、「動作主とのかかわり」などさまざまな面において、相違がみられることがこれまで指摘されてきた。他方、春木(2009, 2010)は、これらを一体のものともみなす。

今回の発表においては総称性に特に注目しながら、この問題を改めて考えてみたい。Lekakou(2005, 2008), Reinhart and Siloni(2005)なども参照しながら、様々な角度から考察を行う。

とりあげたい問題のひとつが「可能」の含意である。従来から「可能」は「中間構文」と結び付けられてきた。たしかに中間構文と「可能」の間には密接な関連があるのだが、他方において(3)のような、「可能」を含意しながら「未完了受動型」と考えるべき例も存在する。

(3)Un bateau, ça se coule facilement pour ramasser des assurances.

(Vinet 1987)

中間構文にとって、「可能」とは何を意味するのか、あらためて考察する。

受動的再帰構文に下位区分を設けるかどうかの問題と関連させながら、もうひとつ考えたいのが、「受動」と「自発」の関係である。

(4)Le verre s'est cassé.

(4)のような文に代表される「自発」は、従来「中立的用法」と呼ばれていたものにはほぼ相当する。本発表においては、「自発」と「中間構文型」の受動的再帰構文との近接性を示しながら、再帰構文の諸用法の中でのこの二つの位置づけを考察する。